

2026(令和 8)年度入学試験問題

国 語

(注意) 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

盈 進 中 学 校

一

次の _____ 線部の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

- ① 委員長を投票で決める。
- ② 身の潔白を証明する。
- ③ 国民には納税の義務がある。
- ④ 手を挙げて意見をのべる。
- ⑤ 梅雨前線が停滞する。
- ⑥ 年末年始の帰省ラッシュ。
- ⑦ 均一の価格で売る。
- ⑧ 彼が新しい市長に就任した。
- ⑨ 体育倉庫にボールを運ぶ。
- ⑩ 世界の貧困問題に取り組む。
- ⑪ エイキュウシが生えた。
- ⑫ シユジュツを受ける。
- ⑬ 駅まで歩いて一時間テイドかかる。
- ⑭ こわれた化石をフクゲンする。
- ⑮ 畑をタガヤス。
- ⑯ セイジツな人がらにひかれる。
- ⑰ 日本列島をジユウダンする。
- ⑱ 真っ赤にソめる。

⑬ 冬のセイザが夜空にかがやく。

⑭ 方位ジシャクを使う。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「音楽の授業は嫌い！」

このページを開いたあなたは、きっとそうなのですね。そしておそらく、こう続けるのでしょうか……「だけど、音楽は好き」。

「音楽が嫌い」という人はめったにいません。授業中には机に突っ伏したり、半ばロバクでいやいや歌ったりしている人でも、音楽室を一步出たら、自分の好きなJポップを歌ったり、スマホで音楽を聴くのが好きだったり、ピアノのレッスンに通って難曲をばりばり弾いていたり……「授業なんか受けなくても、音楽は自分で楽しんでる！」と考える人もいるでしょう。

実は、中学生の頃の私も①そうでした。でも今は「そう考えていた私は、音楽の授業の意味を知らなかったんだ」と言えます。一体、私は何を知らなかったのか……その秘密をあなたにもお教えしましょう。

「学校で・授業でやる音楽」と「自分でやる音楽」の一番の違いは、「②でやる」ということです。そう言われて、まず思い当たるのは「合唱」でしょう。みなさんは「なぜ合唱をやるのか」と考えるより前に先生から楽譜を渡され、「どのパートを歌いたいか決めてください」と言われ（そもそも「歌いたい」なんて言っていないのに）……なんだか「やらされている」という気持ちになったこともあるかもしれません。

でも、考えてみてください。X あなたがすごく歌が得意で、人気のポップス曲をプロ並みに歌える人だったとしても……「合唱」は、あなた1人では絶対にできません（1人では「独唱」になってしまいますから）。同じ「歌う」という行為でありながら、③1人で歌うことと合唱とは、その意味や楽しさは全く違う類のものなのです。

その鍵になるのが、この世界には「合わせる」良さと「合わせない」良さの2種類があるということ。歌を歌うというと、まず「自分だけの表現を」なんて思いがちですが、それは後者の「合わせない」良さ、ソロ（1人）で歌う時に大事になることです。でも、合唱は前者の「合わせる」良さを楽しむもの。「いかにみんなで力を合わせて、より素晴らしいものを生み出すか」が醍醐味になります。いわば、個人のスポーツと団体のスポーツとの違いみたいなものですね。

そして、クラスには大きな声が出せる子も、小さい声の子もいます。もしあなたが、大きな声が出せる人だとして……あなたの声はみんなの頼りになるだろうけど、みんなで「合わせる」合唱ならではの良さをもつとめいっぱい味わうために、あなたが次に考えた方がいいことは何だと思いますか？

それは「小さい声が、自分の大きな声でかき消えないようにコントロールする」ということです。声が小さい子に「大きい声を出して」と言い続けても、その子は既に自分なりに最大限頑張っているのですから、あなたのような大きな声はそんな簡単に出せません。だったらあなたの方が「声の小さい子に自分の声を沿わせる」という新たな挑戦をしてみてください。そのためには相手の声に耳を澄ませることになるし、そうすると「ああ、この子の声ってこんなに可愛かったんだ」「この子の発音の仕方、自分より丁寧だな」などと気づくこともあるでしょう。「声が大きい／小さい」だけに着目していたのでは気づけなかった良さを発見できたのなら、あなた自身がまた1つ成長したということです。

それから、声が小さくて自信がないという人へ。④あなたは確かに、合唱での「リーダー」にはならないかもしれない。でも、スポーツだって「全員キャプテン」では成り立ちません。合唱も、社会も同じです。みんなを率いるリーダーも、それ以外のメンバーも等しく大切。後ろからみんなを支える人、地道に作業をこなす人、場を和ませる人……それらの役には「リーダー」のような明確な名前はないかもしれないけど、そういう「名前のない役」が、社会を回している部分も意外と多いんです。もしも、みんなの役に立つものなんか自分には何一つないと思ったとしても、ただそこにいて、あなたのできる範囲で声を足してくれるだけで、合唱における「役」は十分に果たしています。

そう、⑤合唱とは社会の縮図、生き方の勉強でもある。「声の大きい人も小さい人も、互いの声を尊重し合って1つの音楽をつくる」というのは、民主主義の在り方にも通じますよね。

それから、私の大好きな「創作」の授業のお話をさせてください。

Y

「短歌に旋律をつけてみよう」とか、時には「手拍子だけで音楽をつくろう」とか……こういう活動、「どうせプロみたい

な立派な曲はつくれないから楽しくない」という人もいるのでは。でも、音楽の授業でやる「創作」は、立派な曲をつくることが目的ではないのです。

「つくれて言われても、何から始めたらいいかわからないよ」と戸惑う人もいるでしょう。それも、わりと当たり前です。だから「わからない」のが当然だと思って、とりあえず音を出してみればいいんです。そして、その時の課題の枠の中でたくさん試してみればいい。すると「あつ、さっきのより今の方がいいな」「この音の流れ、今まで試した中で一番面白いな」「いい感じの音の流れができた。もうちょっと面白くしたいから、リズムを変えてみようかな」とだんだん形ができてきて、やってみたいこともどんどん広がっていきます。

「立派なものをつくらなきゃ」といくら考えても何も出てきませんが、まず1つ音を出してみる・試してみることで、音楽の創作は走り出すのです。さらに「これで完璧だ」と思うものができても、まだ試し続けてみたらもっと素敵なアイデアが生まれるかも……そうしているうちに、自分はどんな音が好きなのか、どんな音の流れに魅力を感じるのか、あるいは世の作曲家やアーティストは何をどう考えて音を選び・音楽をつくっているのかにも気づいてくるでしょう。その経験はあなたの「音楽の見方」を変え、既存の曲を歌ったり聴いたりする時にも、⑥その「見方」があなたの音楽の世界をより多面的にしてくれます。

そして、ここでも「学校で、みんなで作る」良さがあります。それは、みんなの作品を見比べることができること。着目すべきは作品の良し悪しではありません。たとえば「手拍子で4拍のリズムをつくろう」というごくシンプルな課題でも、でき上がるリズムは1人ひとり異なる。「複雑なリズムにした方が優秀」というわけではありません。もしかしたら、ターーンと手拍子を1発鳴らすだけの子もいるかもしれないけど、そこに「極限までシンプルを突き詰めた」という美しさを見出すこともできるかもしれない。さらには全く同じリズムができたとしても、大きく鳴らす子とそっと手を合わせる子では、考えていることはきっと全然違うでしょう。

そして、このような活動を通して「同じ課題でも表現の仕方は人それぞれ」「いろいろな見方の『美しさ』がある」「全く同じに見えても、ほんのちよつとの差に大きな意味がある」ことに気づくと、それらの発見は転じて「あの子の『ごめんなさい』の伝え方は、私とは全然違うんだ。あの子はあの子なりの方法で『ごめんなさい』の気持ちを伝えてくれていたんだ」「これは私の短所だと思っていた

けど、裏を返せば長所になるのかも」「僕は平凡な人間だと思っていたけど、この部分は他のやつとちょっと違う。僕ならではの良さはここにあるんだ」というような自他の見え方や、ものの考え方につながっていきます。そうして、自分や相手の「良いところ探し」が得意になると、人との関わり方や世界の見え方も大きく変わってくるのです。

音楽の授業には他に器楽や鑑賞、様々な活動がありますよね。合唱と創作を例にとつてご紹介したように、「なぜみんなでやるのか」という点から音楽の授業を考え直してみると、今までは退屈だと感じていた時間も、⑦かけがえのない大切な時間だと思えるようになるでしょう。

（小島綾野 他『嫌いな教科を好きになる方法、教えてください！』より）

問一

線部①「そうでした」とありますが、「そう」が指す内容として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽は好きで自分でも楽しむことができていたが、音楽の授業は嫌いだった。
- イ 音楽の授業が好きで、歌ったり聴いたり自分でもピアノを演奏していた。
- ウ 音楽の授業の意味を知らなかったせいで、音楽を楽しむことができなかった。
- エ 音楽が嫌いで、授業中には机で伏せたりいやいや歌ったりしていた。

問二

空らん

②

に入る適当なことを、本文中から三字で抜き出さない。

問三 空らん X、 Y に入る適切なことばを次からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだ イ たとえば ウ しかし エ たとえ オ また カ きつと

問四 線部③ 「1人で歌うことと合唱とでは、その意味や楽しさは全く違う類のものなのです」とありますが、そこにはどのような違いがありますか。「1人で歌うことはくだが、合唱はくである」という形で本文中のことばを用いて五〇字以上六〇字以内

で書いて答えなさい。

問五 線部④の「主語（主部）」と「述語（述部）」にあたる部分を、次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「アあなたは、イ確かに、ウ合唱での、エ「リーダー」には、オならないかもしれない。」

問六 線部⑤「合唱とは社会の縮図」とありますが、著者がこのように考えるのはなぜですか。理由を説明した次の文の空らん

a・b に入ることばを、本文中から指定された字数でそれぞれ抜き出しなさい。

社会では「a※六字」の果たす役割は意外と大きく、

声の大小にかかわらずb※四字を尊重し合って1つの音楽をつくる合唱と通じるものがあるから。

問七

線部⑥「その『見方』があなたの音楽の世界をより多面的にしてくれます」とありますが、筆者はこういった音楽の「創作」を学校の授業でおこなうことで、あなたの何が大きく変わると考えていますか。本文中から十四字で二つ抜き出さない。（句読点も一字に含みます。）

問八

線部⑦にあるように、筆者はこの文章で、音楽の授業が「かけがえのない大切な時間」だと述べています。では、あなたは学校の授業のうち、どの授業を「かけがえのない大切な時間」だと考えていますか。次の条件にしたがって書きなさい。

書くときの条件

- ① 文章は八〇字以上一〇〇字以内で書きなさい。
- ② 学校の授業を一つ選び、選んだ理由もふくめて書きなさい。
- ③ 文章は二文以上に分けて書きなさい。
- ④ 書き出しは一マス目からつめて書き、途中で段落を変えないこととします。とちゅう

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある朝、なんとなくいつもより五分早く家を出た瀬^せ埜^の秀^{しゅう}哉^やは、通学路^{とがくろ}の途中^{ちゅうちゅう}で日下部^{くさかべ}くんを見かけた。

日下部^{くさかべ}くんは、ふちにフリルとリボンのついた白い日傘^{ひがさ}をさしていた。

日下部^{くさかべ}くんがかわいい日傘^{ひがさ}を使^{もち}ってゐるってウワサ、本当^{ほんとう}だったんだ。

少し前、五月^ごの中^{ちゅう}旬^{じゆん}ごろだろうか。日下部^{くさかべ}くんの日傘^{ひがさ}のことが、クラスでちょっとしたウワサになった。ウワサ^{うわさ}っていつても、すぐに「まあ日下部^{くさかべ}くんだし」みたいな空気^{くき}にはな^なって、バカ^{ばか}にしたりするような人^{ひと}はい^いな^なかつた^たんだ^だけど。

① どうしたら、あんなふう^{あんなふう}にいら^いれる^るのか、秀^{しゅう}哉^やにはつねづね不思議^{ふしぎ}で^でな^なら^らない。

あんなふう、という^{いう}のはつ^つまり、周囲^{しゅうい}の目^めを気^きに^にし^しない^{ない}よ^ような^な感^{かん}じ^じと^とい^いう^うこ^こと。

たとえば、男子^{なんし}とバス^{バス}ケ^ケ部^ぶの話を^{話を}して^{して}いた^{いた}と思^{おも}つたら、つぎ^{つぎ}の瞬^{しゆん}間^{かん}には女子^{なんし}たちとへア^{へア}ケ^ケア^アの話を^{話を}して^{して}いた^{いた}りする。日下部^{くさかべ}くんには、男子^{なんし}だから女子^{なんし}だから、み^みたいな^な垣^{かき}根^ねが^がない。興^{きょう}味^みが^があ^あれば、相^あ手^てが^が誰^{だれ}でも^{でも}ど^どんな^な話^わ題^{だい}に^にでも^{でも}入^いっ^って^てい^いく。そ^そう^うい^いう^う自^じ由^{ゆう}で^で軽^{けい}や^やかな^な感^{かん}じ^じが^がい^いつ^つだ^だつて^てあ^ある。み^みん^んな^なの^の常^{じょう}識^{しき}と^とか、ル^るール^{ール}み^みたい^{たい}な^なもの^{もの}を^をぼ^ぼー^ーん^んと^と飛^とび^びこ^こえ、だ^だか^から^らか^かわ^わい^いい^い日^に傘^さを^を持^もっ^って^てい^いた^たつて、「ま^まあ^あ」と^とい^いう^う感^{かん}じ^じに^にな^なる。

そ^そう^うい^いう^う日^に下^か部^べく^くん^んが、秀^{しゅう}哉^やは^はち^ちよ^よつ^つと^とう^うら^らや^やま^まし^しい。多^た分^{ぶん}、あ^あの^の日^に傘^さを^を使^{もち}っ^って^てい^いる^るの^のが^が秀^{しゅう}哉^やだ^だつたら、こ^こう^うは^はい^いか^かない。

小^{せう}二^にの^のと^ときに^に学^{がく}級^{きゅう}委^い員^{いん}長^{ちやう}にな^なつて^て以^い来^{らい}、秀^{しゅう}哉^やは^は学^{がく}校^{こう}で「委^い員^{いん}長^{ちやう}」と^と呼^よば^ばれ^れて^てい^いる。学^{がく}期^きが^が変^へわ^わつて^て学^{がく}級^{きゅう}委^い員^{いん}長^{ちやう}じ^じや^やな^なく^くな^なつ^つても、小^{せう}六^{ろく}にな^なつた^た今^{いま}でも、あ^あだ^だ名^なは「委^い員^{いん}長^{ちやう}」の^のま^まま^まだ。

誰^{たれ}か^かに^に説^{せつ}明^{めい}を^を求^{もと}め^めた^たわ^わけ^けじ^じや^やない^いけ^けど、メ^めガ^ガネ^ネ、地^ち味^み、ま^まじ^じめ、の^の三^{さん}拍^{ぱく}子^しが^がそ^そろ^ろつ^つて^てい^いる^るか^から^らだ^だら^らう^うな^なと、秀^{しゅう}哉^やは^は冷^{れい}静^{せい}に^に分^{ぶん}析^{せき}し^して^てい^いる。ち^ちな^なみ^みに^に学^{がく}級^{きゅう}委^い員^{いん}長^{ちやう}は^は小^{せう}三^{さん}以^い降^{かう}も^も何^{なん}度^どか^か経^{けい}験^{けん}し、五^ご年^{ねん}生^{せい}にな^なつて^てか^から^らは^はず^ずつと^と児^こ童^{どう}会^{かい}役^{やく}員^{いん}を^をや^やっ^って^てい^いる。

「委^い員^{いん}長^{ちやう}」と^とい^いう^うあ^あだ^だ名^な自^じ体^{たい}は、べ^べつ^つに^にイ^いヤ^ヤじ^じや^やな^なかつ^つた。い^いか^かに^にも^もま^まじ^じめ^めな^な感^{かん}じ^じが^がす^する^るし、ま^まじ^じめ^めで^であ^ある^るこ^こと^とは^は悪^{あく}い^いこ^こと^とじ^じや^やない。

なので秀哉は、それなら自分は「まじめ」でいこうと決めた。

おかげで、委員長と呼ばれるたびに、ちよつと背すじがのびる。

「ちゃんとしなきゃ」って気持ちになる。

そんなまじめでちゃんとした委員長なので、学校のルールはぜったいだった。

思い出すのは約一年前、去年の五月のこと。

その日の朝、秀哉は、奏太^{かなた}が学校への持ちこみが禁止されているお菓子^{かし}を持ってきているのを注意した。

『ルールなんだから、お菓子を持ってきてきちゃダメだよ』

それは、観光地のゆるキャラらしい、丸つとかわいらしいネコのキャラクターがプリントされた四角いクッキーだった。ゴールデンウィークの家族旅行のおみやげだというそれを、となりのクラスの奏太がわざわざ秀哉のクラスにまで持ってきてくれたのだ。奏太は同じ町内に住んでいて、秀哉とは幼稚園^{ようちえん}のころからの友だち。大人しくてひかえめだけど、やさしくて気づかいのできる性格だ。

奏太は秀哉にさしだしたクッキーをひっこめ、いかにも気まずいのをごまかすような笑みをうかべて、『ごめん』とあやまった。

『委員長には、こういうの、ダメだったよね……』

朝の教室には、先生はいなかったけど、数人のクラスメイトがいた。周囲の視線を感じ、秀哉の耳の先はちよつと熱くなった。おみやげのクッキーくらい、もらっちゃえばよかったのかもしれない。

でも、秀哉はまじめな委員長だった。

みんなの前で、ルールをやぶるようなことはできない委員長だった。

あれ以来、みんなからいっそう「おカタいヤツ」だと思われるようになった気がしている。おカタくてまじめな委員長。日下部くんの白い日傘を見ながら、秀哉はそんな出来事を思い出し、そして考える。もしあのとき、奏太からおみやげをもらったのが日下部くんだったら。

〈中略〉

「——え、おれの日傘？」

児童会会議の翌日の放課後。バスケ部の練習日ではないことを事前に確認したうえで、秀哉は日下部くんに声をかけた。
「いそがしいところ、急にごめん」

秀哉はいかにも委員長らしく、ていねいにあやまってから事情を説明した。

児童会で、熱中症ねっちゅうしょうの注意喚起かんきをあらためてすることになったこと。

秀哉がポスターを作る係になったこと。

「絵の参考にしたいたから、日下部くんの日傘を見せてほしいんだ」

画用紙のまんなか大きく日傘を描きえが、『熱中症に注意！』という文字を入れたポスターを作るつもりでいる。けど、資料もなしに日傘は描けそうになく、それならと思いついたのが日下部くんの日傘だった。

「参考にするのは、かまわないけど。③なんで、あの日傘？ 日傘なら、間坂まさかさんとか、ほかにも使ってる人いるし」
「それは、」

秀哉は言葉につまった。うまい言葉がとっさに出てこない。

たしかに日傘というだけなら、家にある秀哉の母親のものでもよかった。

でも、母親の日傘はふううのおりたたみ傘と区別がつかないような、シンプルなもの。

描きたいのは、そういうのじゃなかった。

ポスターの絵は、人目をひくためのもの。それならやっぱり、目立つ形で、ひと目で日傘だとわかるもののほうがいい。

「日下部くんの日傘が、すぐく日傘っぽかったから」

悩なやんだくせに、結局上手に説明できなかった。

けど、日下部くんは、その丸い目を大きく見ひらく。

「それ、わかる！ あの日傘、すごく日傘っぽいよね！」

そして、なんだかうれしそうに笑った。よかった。

そんなわけで、日下部くんが昇降口から日傘をとってきてくれ、人のいなくなった六年一組の教室でふたりになった。ふたりきりの教室は、よく知った場所なのに、なんだかいつもと空気がちがう。

日下部くんは教室のまんなかに立つと、パツと日傘をひらき、軸の棒を肩に載せてくるりと優雅にまわした。黒いランドセルと日傘の白が対照的で、秀哉はボードゲームのオセロを思い出す。

「どう？」

秀哉は日下部くんに近づき、背中側、日傘のほうにまわった。近くで見ると、ふちのフリルはこまかなレース生地できていて、リボンにもひとつひとつに小さなパールがついている。遠くから見たときはわからなかったけど、傘の部分の白い生地には、生地と同じ色味の糸で花の刺繍もされていた。〈中略〉

秀哉は学校のタブレットのカメラを起動し、日下部くんの日傘をいろんな角度から写真におさめた。

カシャ、カシャ、カシャ、とシャッター音が鳴るたびに、日下部くんは立ち方を変えたり傘を持つ手を変えたりしてポーズを決める。日傘の写真が撮りたかっただけなのに、日下部くんの撮影会みたいになってきた。

三十枚くらい日傘と日下部くんの写真を撮ってから、今度は日傘単体でも撮らせてもらう。机を四つくっつけて台にし、中央にひらいた日傘をおいた。〈中略〉

「瀬埜くんは、日傘は持っていないの？」

日下部くんの質問に、「持っていない」とこたえた。

「登校するときに、ぼうしはかぶってるけど。あ、でも、日傘のことは調べたよ」

「調べた？」

秀哉はタブレットを近くの机においた。撮影した写真は、もう五十枚以上になっている。カメラアプリを一度閉じ、メモアプリをひらく。

「せっかくだから、ネットとか図書室で調べたんだ。相手のことをよく知らないと、ちゃんと描けないと思って」

「相手って、日傘？」

「そう」

日下部くんが、タブレットの画面をのぞきこむ。

「傘が使われはじめたのは、約四千年前だって言われてるんだ」

「大昔だね」

「しかも、先に生まれたのは、雨傘じゃなくて日傘のほう。儀式ぎしきのときとかに、王さまとかえらい人にさしかけられてたんだって。権威けんいの象徴しょうしだったらしい」

「『けんいのしょうちょう』って？」

日下部くんの質問に、秀哉は少し考えてこたえた。

「えらい人の証あかし、みたいな感じ？」

家に帰ったら、④「権威の象徴」を辞書でちゃんと調べようと、秀哉は頭の片すみにメモする。

「そんなふうに使われていた傘は、やがて一般いっぽんの人にもひろまっていったんだ。おしゃれな日傘はぜいたく品、雨よけのこうもり傘は実用品。日下部くんの日傘は、十九世紀のパリのおしゃれなパラソルに似たデザインだと思う」

「へえー！ すーいー！」

日下部くんがこれでもかと感心してくれるので、秀哉は気分をよくし、さらにあれこれ話していった。

傘の骨には、昔はくじらの骨が使われていたこと。

傘が日本に入ってきたときも、最初は日傘として使われていたこと。

一般の人にひろまった雨傘が、貧弱や儉約けんやくの象徴で、品位がないと思われていた時代もあったこと。

「なんで貧弱で儉約なの？」

「貧弱は、雨に濡ぬれても平気な健康な身体じゃないってこと。儉約は、雨に濡れて服がダメになることを気にするのはケチってこと」

「雨に濡れて風邪かぜとかひきたくないし、服もダメにしたくないけどね」

「ぼくもそう思う」

日下部くんが自分のランドセルからタブレットを出し、秀哉が話したことをメモしようとした。なので、秀哉は自分のメモのデータを日下部くんと共有し、見られるようにしてあげる。

「ありがと。さすが瀬埜くんって感じ」

そんなふうには礼を言われて、ふと気がつく。

⑤ 日下部くんは、秀哉のことを、委員長と呼んでない。

同じクラスとはいえ、そこまで親しくないからだろうか。けど、さして仲のよくないクラスの女子ですら、秀哉のことを委員長と呼ぶ。であれば、委員長というあだ名に、仲のよさは関係ないように思えた。

まあでも、日下部くんだからかな。

そう考えたら、ストンと納得できるような感覚になった。深い意味なんてきつとない。秀哉は日傘のことに意識をもどす。

「今は傘っていえば雨傘なのに、昔は日傘のほうがよく使われていて、『けんいのしょうちょう』だったなんて、おもしろいね」
そして、日下部くんは、十九世紀のパリのパラソルに似たデザインの日傘をたたんだ。

日下部くんがせっかく日傘を見せてくれ、あんなふうに「さすが」と言ってくれた。

なので、秀哉はその期待にこたえようとまじめに考えた。

日下部くんと話した翌日から、部活に入っていない秀哉は、放課後の教室でポスター制作にはげんだ。

日傘は、直線と曲線の組みあわせでできている。丸つとした傘の部分と、まっすぐな石突きや軸の棒。定規とコンパスを使ってそれらを画用紙の上で再現しようとがんばってみるも、どうにもうまくいかない。

数日 ⑥ したものの状況は改善せず、秀哉は奏太に声をかけることにした。昔から絵が得意で、絵画教室に通っていたこともあるのだ。夏のポスターコンクールでは、何度も賞をもらっている。

自分のクラスじゃないからか、いかにもおちつかないような雰囲気^{ふんいき}で奏太は一組の教室に入った。そして、秀哉が ⑥ している下書きを見て考えこむ。

「こまかいところから、考えすぎなんじゃないかな」

奏太は自分の連絡帳^{れんらくちょう}をとりだすと、あいているページにエンピツでササッと傘のシルエット^{りんかく}というか、輪郭を描いた。それはたしかに、傘っぽい形に見える。

けど、いかにもふつうの傘っぽいし、なんていうか……。

「傘って、すごく線がきれいじゃん？ 直線と曲線の組みあわせっていうか。そういうの、ちゃんと描きたくて。あと、描きたいのは、こういう傘」

タブレットを操作して、先日撮影した日下部くんの傘を奏太に見せる。すると、奏太は写真を見るなり、いかにもギョツとしたような表情になった。

「これ……」

変な写真でも表示してしまっただろうかと、秀哉はタブレットの画面をあらためて見た。でも、表示されているのは、日下部くんの白い日傘。奏太の反応を不思議に思いながらも、秀哉は説明した。

「日下部くんの日傘だよ。奏太、見たことなかった？ 日下部くんがこういう日傘使ってるって、うちのクラスだと有名なんだけど」
奏太は小さく首を横にふり、その目を足もと、自分の上ばきにおとす。

「それで、この傘だと、もっと丸みがある感じだろ？ だから――」

そのとき、奏太がガタリと音を立てていすから立った。

「こ、こだわりがあるなら……秀哉が自分で考えて描いたほうが、いいと思う」

「だから、それがうまくいなくて——あ、奏太！」

奏太は手早く荷物をまとめ、パツと教室を出ていってしまふ。

何か、気にさわることもしてしまったんだろうか。

ふいに、おみやげのクツキーをつっぱねてしまったときのことを思い出し、胸がざわついた。秀哉はあわてて廊下ろうかに出たけど、すでに奏太の姿はない。

代わりに、そこには思いがけず日下部くんの姿があった。

体操服の上に、大きな数字のプリントされた、メッシュ生地のオレンジ色のビブスを着ている。数字は『7』、ラッキーセブン。

「瀬埜くん、何してんの？」

「ポスターの絵、描いてて……」

いなくなった奏太のことが気になったけど、日下部くんが秀哉のわきを抜ぬけて教室をのぞいた。

「あの画用紙？」

「そう。でも、うまく描けなくて」

日下部くんの目は、日傘の写真を表示したままの秀哉のタブレットにむく。せつかく日下部くんは日傘を見せてもらったというのに、申しわけない気持ちになってきた。

「あの写真のみたいに、きれいに描きたいんだけど……」

日下部くんはタブレットをまじまじと見つめ、そしてポンと手をたたいた。

日下部くんは秀哉のタブレットをつかむと、ずんずんと歩いていった。背が高い日下部くんは、足が長くて一歩が大きい。追いか

る秀哉は小走りになる。

「どこに行くの？」

「職員室。もともと用があつたし、ちょうどよかったよ」

何がちょうどよかったのかわからないまま、日下部くんは「失礼しまーす」と大きな声でことわって、職員室のドアをあけた。そのまますすぐ奥に進み、バスケット顧問の男の先生に声をかける。用事というのは、バスケットのことだったんだろう。と思っていたら、秀哉のタブレットを見せ、何やら話しだす。

そうして、職員室の入口で待つこと数分。

日下部くんは、秀哉のもとにもどってきた。その手には、秀哉のタブレットと、紙に拡大印刷されたモノクロの日傘の写真がある。

「先生に頼んで印刷してもらった。これを写せば、きれいに描けるんじゃない？」

秀哉は複雑な気持ちになりながら、タブレットと印刷された写真を受けとった。

日下部くんは、親切で写真を印刷してくれた。

だけど。

「そういうのって、いいのかな」

こういう絵って、自力で描いてこそなんじゃないだろうか。

けど、日下部くんは目をパチクリとさせる。

「きれいに描きたいんだよね？」

「うん」

「もしかしてそのポスター、コンクールとかに出すの？」

「まさか。校内に貼るだけだよ」

「なら、きれいに描ける方法でよくない？」

日下部くんの言いたいことはわかる。わかるんだけど。

「……なんか、ズルみたいな気がして」

うーんとうなっている秀哉に、日下部くんはすかさず聞いてきた。

「これでズルすると、何か問題があるの？ 誰かに怒^{おこ}られたりする？」

⑦ そんな言葉にハツとした。

ポスター作りにおいて、秀哉がズルをしようが何をしようが、ほかの人には関係ない。

ズルを気にしているのは、イヤだと思っているのは。

秀哉自身だ。

委員長だから、いつもちゃんとしてて、ルールを守る。

そういう委員長でいなきゃって思ってた。

……でも、本当はちがうのかもしれない。

そういうキャラじゃないとダメだって、誰よりも強く思っていたのは。

「じゃあ、おれ、練習もどるね」

バイバイ、と日下部くんが軽く手をふる。

秀哉はそれに手をふりかえしつつ、日傘がプリントされた紙をかかげてヒラヒラさせた。

「これ、ありがとう！」

日下部くんは白い歯を見せてさわやかに笑うと、左手の親指をぐつと立てて去っていった。

(神戸遥真『日下部くんには日傘が似合う』より)

問一

線部①「どうしたら、あんなふうになれるのか」とありますが、どんなふうになれるのでしょうか。本文中から九字と十五字で二つ抜き出さない。

問二

空らん ② には、秀哉が想像する、日下部くんのおみやげの受け取り方が入ります。日下部くんならどう受け取ったか考えて、空らんに入ることばを書きなさい。

問三

線部③「なんで、あの日傘？」とありますが、どうして日下部くんの日傘がよかったのですか。理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 熱中症のポスターには、男子からも女子からも人気のある日下部くんの日傘を描きたかったから。
- イ 秀哉の母親の日傘が、おりたたみ傘と区別がつかないシンプルなもので描きやすそうだったから。
- ウ 日下部くんの日傘が、ひと目で日傘とわかる、人目をひくような日傘っぽいものだったから。
- エ 熱中症のポスターの絵の参考にしたかったけれど、秀哉自身が日傘を持っていなかったから。

問四

線部④『権威の象徴』を辞書でちゃんと調べよう」とありますが、この部分を読んだあなたは、自分自身も気になったので辞書で調べてみました。まとめては載^のっていないなかったので、「権威」と「象徴」を別々に調べることにしました。

資料A

けんい【権威】〈名詞〉①他をおさえつけて従わせる力（をもつ人）。②「学問・技術などの方面で」ある分野においてぬきんでてすぐれた専門家。「法医学の―」

資料B

しょうちょう【象徴】〈名詞〉目に見えない物事を、形のある別のもので端的に表すこと。またその表されたもの。「ハト」が平和を表す類。シ。

(1) 「権威」を調べると、資料Aのように書いてありました。この場面では①・②どちらの意味がふさわしいですか。番号で答えなさい。

(2) 次に「象徴」を調べると、資料Bのように書いてあり、最後に「象徴」を言いかえた言葉が載っていました。「シ」から始まるカタカナ四字を書きなさい。

問五

線部⑤「日下部くんは、秀哉のことを、委員長と呼んでない」とありますが、その理由を秀哉はどう考えましたか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日下部くんは仲がいい人をわざとニックネームで呼ばない、といううわさがあるから。
- イ 秀哉だけが日下部くんのことを「日下部くん」と呼んでおり、日下部くんもまねているから。
- ウ 日下部くんは相手がどんな人でも垣根なくつき合え、立場や役割で人を決めつけないから。
- エ 秀哉が物知りなことにおどろいて、尊敬の気持ちを込めてきちんと名字で呼んでいるから。

問六

二か所ある空らん⑥に入る四字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無我夢中
- イ 起死回生
- ウ 以心伝心
- エ 試行錯誤しこうさくご
- オ 喜怒哀楽きどあいらく

問七

線部⑦「そんな言葉にハッとした」とありますが、なぜ秀哉はハッとしたのですか。その理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 委員長はまじめでないといけないと自分自身で決めつけていたことに気が付いたから。
- イ 日下部くんにもコピーを写すというズルい一面があることに気づいて、失望したから。
- ウ 委員長なのだから、いつもちゃんとしていないといけないと改めて実感したから。
- エ 写真をコピーして使う日下部くんの斬新な発想は自分にはないと感心したから。ざんしん

問八

「日下部くん」の人物像として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 運動は苦手だが、絵を上手に描いたり文章をまとめたり人に教えるのが得意な人。
- イ 人のいいところを見つけて、それを素直に言葉にして相手に伝えることができる人。
- ウ 色んな人から情報を集めて、かわいくておしゃれなものをいつも集めている人。
- エ 友だちに話しかけるのは苦ではないが、先生や大人と話をするのが苦手な人。

四

次の言葉を例にならってローマ字（ヘボン式）に直して答えなさい。なお、書き出しはすべて小文字とします。

- ① 生活（せいかつ）
- ② 花粉（かふん）
- ③ 食事（しょくじ）
- ④ いちご
- ⑤ ざるそば

例

盈進（えいしん）

eishin